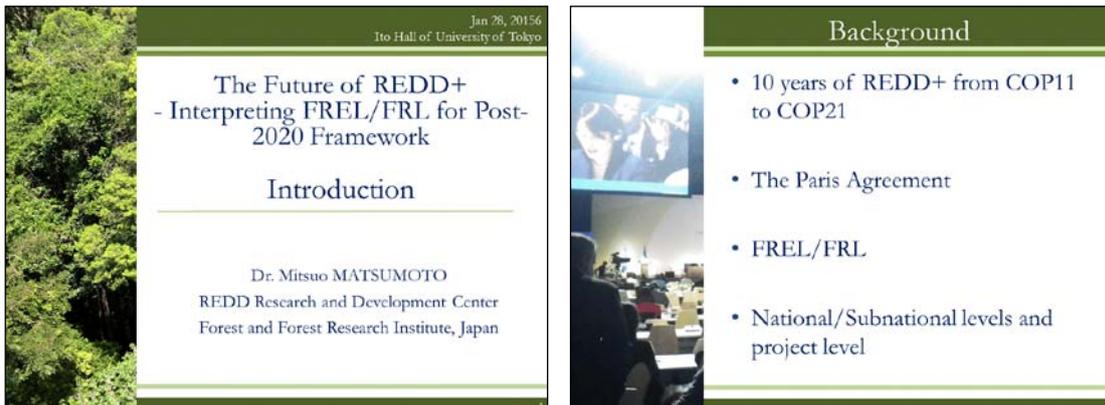


開催趣旨説明

松本 光朗（森林総合研究所 REDD 研究開発センター長）

本セミナーでは、非常に刺激的で専門的、そして未来志向の議論が進むだろう。ここでは本セミナー開催趣旨についてふれる。



最初にREDDの端緒としてAvoided Deforestation（森林減少の回避）が提案されたのが2005年のCOP11だった。それからCOP21まで10年の間に、Avoided DeforestationはREDDになり、REDD+になり、そしてカンクン合意¹やワルシャワ合意²を経て、階段を上るように少しずつ世界の合意を得て、COP21のパリ協定に達した。この過程は本当にわれわれにとっても記念すべきことで、10年前までは、この話題が世界的な合意に至ることを期待はしていたが、確信はできなかった。パリ協定においては、REDD+が明確に位置付けられ、REDD+の実施や支援を奨励するという明確な文言が加えられた。森林の重要性が非常に強調され、森林の吸収源・貯蔵庫としての重要性を認識するという前文もが置かれたことも心強く感じた。

この1年で森林参照排出レベル／森林参照レベル³（FREL/FRL）について、各国からの提出が進んだ。この参照レベルは、単にREDD+の活動を評価するベンチマークにとどまらず、その背景として国の体制や将来的な活動・政策の見通し、モニタリングシステムの在り方などが全て凝縮されたものと言えるだろう。その参照レベルを読み解くことにより、それぞれの国がどのような考えで、どのような政策で今後REDD+を進めていこうとしているのかが分かるのではないかと考えている。

また、日本においても世界においても、既にプロジェクトレベルの活動が進んでいる。日本ではJCMにおいて、既に二つのプロジェクトが公式に進んでいる。このようなボランティアベースの活動については、各国の排出削減目標達成に利用できるということがパリ協定で明記された。われわれが進めているJCMについても、そのクレジットが利用できる

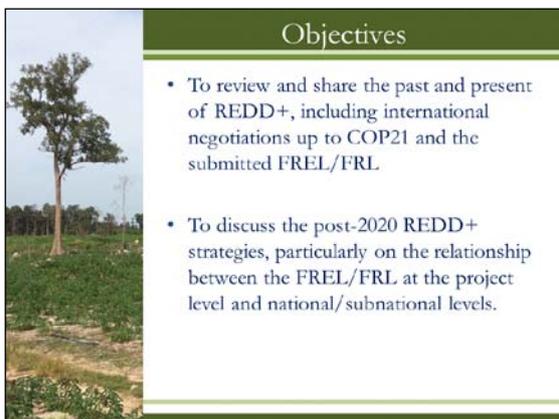
¹ <http://unfccc.int/resource/docs/2010/cop16/eng/07a01.pdf>

² <http://unfccc.int/resource/docs/2013/cop19/eng/10a01.pdf>

³

https://unfccc.int/files/land_use_and_climate_change/redd_web_platform/application/pdf/redd_20141113_unredd_frel.pdf

という枠組みが合意された。しかし、REDD+においては基本的に国レベルあるいは準国レベルでの活動を求めているので、プロジェクトレベルの活動との間にどのようにして関係を構築し、国・準国レベルの活動と繋げていくのかということは非常に大きなチャレンジだ。このようなバックグラウンドを共有した上で議論を進めていきたい。



本セミナーでは、まず REDD+の過去と現在を、COP21 までの国際交渉の歩みや既に提出された参照レベルも含めレビューし、共有する。それらをベースにして、2020 年以降の REDD+をどのような戦略で進めていくのかということを議論したい。今回の議論では、非常に専門的な話題や、未来志向のチャレンジングな試みも俎上に上がってくる。刺激的なセミナーになると考えている。



このような目的に合わせて、以下のようにプログラムを用意している。まず、基調講演では、REDD+の過去と現在というテーマで、気候変動に関する国際連合枠組条約⁴ (UNFCCC) や国際連合食糧農業機関⁵ (FAO) で活躍してきたDr. Sanz-Sanchezに、この10年の振り返りをしていただく。彼女はこのテーマの話者としてはベストパーソンだろう。

セッション1では、REDD+の参照レベルについて、各国の最新の情報を当該国の専門家から紹介していただく。それぞれの国がどのような考えを持ち、どのような政策の下で参

⁴ <http://unfccc.int/2860.php>

⁵ <http://www.fao.or.jp/index.html>

照レベルを設定しているかということに焦点を当てる。

セッション2では、国・準国レベルとプロジェクトレベルをどう関係付けていくかという問題を取り上げる。この関係づけの作業を「スケーリング」と言うが、これについて行われているさまざまなチャレンジの現状について報告いただく。その中に、今後の議論のヒントが必ずや隠されていると信じている。

そして各セッションでの議論を踏まえ、Dr. Ma のモデレートにより、「パリ協定後の REDD+の未来」をテーマに、パネルディスカッションを行う。以上のような内容で、会場の皆さんにも参加してもらいながら議論を進めていきたい。



刺激的な1日をエンジョイしてほしい。